東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

短期語学研修の就職活動へのインパクト：参加学生のインタビュー調査を通して

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-08-01 キーワード (Ja): キーワード (En): College Student, Short-Term Study Abroad Program, Job-Seeking Activities, Global Oriented, Career for Women 作成者: 小林,美文 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/151630

短期語学研修の就職活動へのインパクト
――参加学生のインタビュー調査を通して――

The Impact of Short-Term Study Abroad Programs on Job-Seeking Activities: An Analysis of Participants' Interviews

小林美文（立教大学兼任講師）
Minori KOBAYASHI（Rikkyo University）

<要約>

本論文では，大学生が就職活動（又は大学院進学準備）等のキャリア形成に，在学中に参加した短期語学研修の経験をどのように活かしたと自己評価しているのか検討する。調査対象者は，某大学在学中に研修に参加した学部生（女子学生 13 名）で，進路決定後にインタビュー調査を行った。調査の結果，13 名中 7 名は短期語学研修経験を就職活動に活かしたと自己評価し，6 名はほとんど又は全く活かしていないと評価した。前者の「活用型」の学生は，企業の総合職や教員，大学院進学など，専門性の高い職業を目指し，英語力向上，国際移動にも積極的な国際志向の傾向が見られた。後者の「非活用型」の学生は，語学力を必要としない国内業務担当を希望する国内志向，実家から通勤可能な範囲の会社に就職する地元志向が強く，ライフ・ワーク・バランスを優先させる傾向があった。また，「非活用型」の学生は，語学研修経験を短期的，受動的であるため，就職活動で活用しなかったと評価していた。この結果から短期語学研修の事前学習，振り返りの重要性が示唆された。

＊キーワード：大学生　短期語学研修　就職活動　国際志向　女性のキャリア

1. 問題の背景と目的

近年，グローバル化が加速する世界に対応可能な人材育成への要求が高まっている。グローバル化がもたらした世界的な経済競争の中で，日本が後れを取ることに危機感を持つ経済界からの要求に対して，産学官が連携し，「グローバル人材」育成を意図した政策が展開されている（太田 2018)。「グローバル人材」とはどのような人材を意味するのか，その定義はさまざまだが，グローバル人材育成推進会議（2012）は，グローバル人材を「我が国がこれからのグローバル化した世界の経済・社会の中にあって育成・活用していくべき」人材と定義した上で，必要な「要素」として①語学力・コミュニケーション能力②主体性・積極性，チャレンジ精神，協調性・柔軟性，責任感・使命感③異文化理解と日本人としてのアイデンティティをあげている。

グローバル人材育成，特に学生の留学促進を目的として展開されてきた施策には，すでに終了した「大学の国際化のためのネットワーク形成推進事業（グローバル 30)」や，現在進行中の「スーパーグローバル大学創成支援事業」,「官民協働海外留学支援制度～トビタテ！　留学 JAPAN 日本代表プログラム～」などがある。その成果として，学位取得を目的とした長期留学（1 年以上）者が 2004 年をピークに減少している一方で，日本の大学に在学中，大学間の協定に基づく留学などにより海外留学を経験する学生の数は，着実に増えている。しかし，その約 6 割は 1 ヶ月未満の短期プログラムに参加しているという報告もある（日本学生支援機構 2017)。

本稿では，大学（以下，A 大学とする）在学中，1 ヶ月未満の短期語学研修に参加した女子学生 13 名に対して進路決定後にインタビューを行い，学生が就職活動や進学準備をおこなう中で，どのように語学研修の経験を活かしたと自己評価しているのか検討したい。

2. 先行研究の検討

国の政策としてグローバル人材育成の必要性が高まるにつれ，大学で実施される海外体験学習に注目が集まるようになり，また，その形態は多様化している（子島・藤原 2017)。大学が実施主体，または大学との連携で行われる海外体験学習は，1 学期または 2 学期という長期にわたって交換留学制度を利用して留学する「長期留学」の他にも，1 ヶ月程度の「語学研修」や「インターンシップ，社会起業体験」がある。このほかにも，キリスト教系の大学で実施されていることが多い「サービスラーニング」や「ワークキャンプ，ボランティア」，主にはアジアでグループ活動を行う「海外研修（フィールドスタディ)」など，多岐にわたっている。

では，学業を主な目的として海外に滞在した経験を持つ人々は，自らの職業キャリアに海外経験が中期的，長期的にどのような影響を及ぼしたと考えているのだろうか？　この問いに対して国内での大規模な量的調査がまとまり，知見が蓄積されつつある（横田ら 2018)。この研究では，高校卒業後に 3 ヶ月以上の留学経験のある人を対象とし，4,489 件の有効回答を得ている。語学留学，学部留学，大学院留学などを網羅しているが，大学レベルの留学では，学位取得を目的とした留学経験者（海外の大学に 3 年以上在籍）は，留学非経験者に比べて，年収水準が高く留学経験が収入を上げるだけでなく，自分のキャリアを設計したり実際に就職活動を行ったりする際に有用だったことや留学で身に付けた知識や語学力が評価されていることを実感している傾向があった（新見ら 2018)。同様に，大学レベルの単位取得を目的とした留学経験者（海外の大学に 3 ヶ月以上 2 年未満在籍）が自らのキャリアを評価した結果

からは，留学経験者が非経験者に比べて，能力の向上，意識の高まり，満足度において高い自己評価をしていることが明らかになった(新見・岡本 2017)。また，留学期間別の比較では，短期（3ヶ月以上6ヶ月未満）の留学経験者に比べて，より長期の留学経験者は留学の経験がキャリア形成や採用時の評価に及ぼした影響がより大きいと自己評価をしていた。しかし，能力の向上と満足度については，長期留学（1年以上2年未満）と短期留学（3ヶ月以上6ヶ月未満）のグループの自己評価に差は見られず，意識の高まりについても，留学期間別のグループ間に有意差はなかった。このことから，留学期間の長さだけが，能力の向上や意識の変容，満足度を決定づける要因とは言えず，いわゆる「グローバル人材」の育成には，短期留学も効果があることを示唆している。

上述の量的調査は3ヶ月以上の留学経験者を対象としたため，多様化する海外体験学習参加者のうち，調査対象となるのは留学期間が比較的長い長期留学（交換留学）経験者のみだった。1ヶ月未満の海外体験学習のキャリア形成に及ぼすインパクトに関する研究が蓄積されていないというのが現状（新見・岡本 2017）だが，「補足資料」としてまとめられた報告（岡本 2017）がある。1ヶ月未満の海外学習体験（大学実施）に参加した卒業生を対象としたこの質問紙調査には，参加者13名が回答し，就職活動（進学の準備も含む）に海外学習体験を活かすことが出来たかという質問に対して，回答者全員が活用できたと回答している。活用した具体的内容としては「能力の向上」「意識の高まり」「キャリア形成」「採用時の評価」という上述の量的研究に含まれる項目との共通性が見られた。

大学生にとって，また保護者にとっても，キャリア形成の入り口である就職活動は，最大の関心事の一つだと言ってよいだろう。大学生の就職活動は，長年にわたり，新規学卒一括採用という雇用慣行のもと，「就職協定」という諸外国ではあまりなじみのない自主規制に従い横並びに行われてきた（中村 2014）。協定の日程変更はメディアで大きく取り上げられ社会的な注目を集めることも多い。また，キャリア形成には今日でもジェンダーの違いが大きく影響している(谷田川 2016)。男女雇用機会均等法，男女共同参画社会基本法などの法律面の整備が進み，女子学生にもキャリアを持ちながら，結婚，出産，育児などを自ら選択するライフコースが可能となった。しかし，それは同時に，就職活動の際に自分が人生をどう生きたいのか，ある程度決定する必要があるという葛藤を生み出した。

次に，この就職活動を海外学習体験との関係という点から見ると，就職活動が在学中の長期留学（1年程度）を阻害する要因があるという知見が示されている。例えば，小林（2011）は，学生が考える留学を阻害する要因は，経済的な理由，語学力の不足，就職活動と留学期間が重複することの3点に集約されると述べている。また，太田（2018）は，①所得の減少②英語圏の大学の授業料高騰③就職活動の早期化と長期化④海外留学・経験の評価の低さ⑤語学力不足を阻害要因としてあげている。

これに対して，語学研修は夏季又は春季休暇中の数週間に実施されるため，就職活動の阻害要因となる可能性は低い。しかし，就職活動や進学準備は学生のライフコースにとって非常に重要である。また，1ヶ月未満のプログラム参加者が増加しているにもかかわらず，1ヶ月未満の海外体験学習が大学生のキャリア形成に及ぼす影響に関する知見が蓄積されていないという状況を勘案すると，小規模であるが，進路決定後の学生を対象とした研究は意味があると考える。

そこで，多様化する海外体験学習のうち短期

語学研修に焦点を当て，参加者のインタビュー調査を分析し，以下の問いについて検討する。

①短期語学研修に参加した学生は，研修経験を就職活動（または進学準備）に活用したと考えているのか。

②活用した参加者は，どのように活用したと自己評価しているのか。

③活用しなかった参加者は，どうして活用しなかったと自己評価しているのか。

3. 調査対象と方法

本稿では，A大学実施の海外短期語学研修に2013年度～2015年度に参加し，2015年度または2016年度に卒業した女子学生13名を分析の対象とする。対象者のプロフィールは，表1のとおりである。この13名の中には修学旅行や家族旅行などの短期間の海外渡航経験，家族に伴われての海外在住経験のある学生はいたが，高校，大学時代の留学（3ヶ月以上）経験者は含まれていない。

調査対象者が参加したのは，A大学が夏季又は春季休暇中の3～4週間実施した短期語学研修である。A大学の学生であれば所属学部に関係なく参加することが出来る。研修先は，アメリカ，カナダ，ヨーロッパ，オセアニアで，大学付属英語学校で行われる英語講座に参加し，寮に滞在またはホームステイをする。現地での英語講座は，一部，A大学の学生のみで実施される授業もあるが，大半は，他国の学生や日本の他大学生と同じクラスで学ぶ混合授業である。出発前に手続きや現地での生活準備，危機管理を目的としたガイダンスは数回実施されるが，学習面での事前学習は特に行われていない。研修から帰国後は，簡単な報告書を提出することになっている。

調査は，2015年度卒業者については2016年1月から3月に，2016年度卒業者については，2016年10月から12月に，一対一で半構造化インタビューを行った。面接の長さは，一人につき約1時間から2時間30分だった。インタビューは許可を得た上で録音し，文字に起こしたものを，KJ法を使って分析した[1]。

表1　調査対象者の詳細

名前（仮名）	卒業年度	就職先（進学先）	語学研修先	参加年度	参加時学年	インタビュー実施月	活用／非活用
石原	2016年度	大手都市銀行	ヨーロッパ	2014年度	2年	2016年11月	非活用
井上	2015年度	A大学大学院	カナダ	2014年度	3年	2016年 2月	活用
川本	2016年度	信用組合	ヨーロッパ	2014年度	2年	2016年11月	非活用
久保寺	2015年度	地方公務員（行政職）	アメリカ	2013年度	2年	2016年 2月	非活用
小森	2015年度	大手新聞社	アメリカ	2013年度	2年	2016年 1月	活用
鈴本	2016年度	専門商社	アメリカ	2014年度	2年	2016年11月	非活用
相馬	2016年度	A大学大学院	ヨーロッパ	2014年度	2年	2016年12月	活用
田原	2015年度	大手通信キャリア	カナダ	2014年度	3年	2016年 3月	非活用
前田	2015年度	財団法人	アメリカ	2014年度	3年	2016年 2月	非活用
三浦	2016年度	公立高校教員	オセアニア	2015年度	3年	2016年11月	活用
宮田	2016年度	大手メーカー	ヨーロッパ	2014年度	2年	2016年10月	活用
山内	2015年度	A大学大学院	カナダ	2014年度	3年	2016年 2月	活用
山田	2016年度	他大学大学院	オセアニア	2015年度	3年	2016年11月	活用

以下，短期語学研修の経験を，その後，就職活動（または進学準備）に活かしたと自己評価をした学生を「活用型」（7名），ほとんど又は全く活かさなかったと自己評価した学生を「非活用型」（6名）と分類し，それぞれのグループの学生の語りについて検討する。

4. 活用型の学生の語り

本節では，活用型学生の事例に焦点を当てる。進路を比較すると，活用型の学生は非活用型学生に比べて専門性が高い進路を選択し，海外駐在・出張や留学などの国際移動にも積極的な傾向が見られた。また，活用型学生の研修体験に関する語りは，大きく二つに分かれていた。以下，二つのタイプの語りについて，活用型7名のうち5名の事例を検討する。

4.1 積極性，柔軟性，興味の認識

まず，第一のタイプの語りが見られた2名（小森さん，相馬さん）の事例を検討する。この語りは，出発前に計画していた訳ではなかったが，研修中に自らの積極性，柔軟性，興味を認識し，それがその後の大学生活や就職活動，進学準備の支えになったという語りである。

2016年春，大手新聞社（営業系）に入社した小森さんが3週間の語学研修（アメリカ）に参加したのは2年生の夏休みだった。行きの飛行機の中から日本語が通じず英語を話す必要があり，他の参加学生から英語で飲み物を注文してくれと頼まれ「変な自信」がついたという。それまでは，失敗するのが怖かったが，「すぐに吹っ切れ，失敗は成功へのステップ」だと思い，「自信」というか，「計画通りにいかないと不安になったのが，計画通りいかなくても何とかなると思うようになった」という。

研修終了後，小森さんはその行動力を発揮して様々なことに挑戦するようになり，その一つが3年次から始まるゼミへの挑戦だった。小森さんのゼミは人気があり，応募倍率は2.5倍から3倍だという。不合格になると定員に達していないゼミに所属するかゼミに入るのを諦めるしかないので，人気ゼミに応募するのをやめようかと思ったこともあったが，挑戦し合格した。小森さんのあげたもう一つの例は，ヨーロッパへの一人旅である。卒業論文の資料を集めるためヨーロッパに旅行した際に，大学の奨学金に応募し旅費の一部に充てることができた。ヨーロッパに一人で行ったのも，その準備段階で奨学金に応募したのも，語学研修で身に付けた積極性があったためだと小森さんは考えていた。そして，インタビューでは，「迷ったときにリスクを取るようになり，失敗も成功へのステップだと思えるようになった」と語った。

小森さんは就職活動中もこの積極性を発揮し，将来は海外で仕事をしてみたいという希望を持っていた。小森さんの英語力はそれほど高くはないが，入社する新聞社の集団面接では「TOEIC 900点超え（の学生たち）に囲まれてしまった」こともあったという。しかし，自分の英語力については「英語の勉強は就職してからすればいい」と前向きな考えを持っていた。また，記者職での採用ではないが，海外の子会社への異動の可能性もあるということで，海外で働くことにも意欲を見せていた。

このように，小森さんは短期語学研修中に身に付けた積極性をその後の大学生活や就職活動に活かしたと自己評価していた。一方，別の活用型の学生，相馬さんは，現地での他国の留学生との会話やホームステイ経験での発見が，長期留学を目指すやる気につながったと語った。

相馬さんは，2017年春，A大学の大学院に進学した学生である。インタビュー時点では，研究者を目指すかについては未定で，大学院進学は，研究者になるかどうか決定するまでの「2年間の留保」ということだった。

母親は相馬さんが幼い頃から英語教育に熱心

だった。アメリカの大学を卒業し英語が堪能な母親は，幼児向け英語学習番組を見せるなどして相馬さんに英語を身に付けさせようとしたが，相馬さん自身は英語にほとんど興味を示さない子どもだった。英語よりもむしろ日本語や日本文学に関心があった。子どもの頃から日本語が好きで，漢字辞典を読むぐらいだったという。

相馬さんの英語に対する関心の低さが変化し始めたのは，A大学入学後のことだ。英語の必修科目を担当する英語母語話者の教員に自分が話す英語が通じたのが嬉しかった。自分の母語である日本語とは別の言語を話すときの思考回路の違いが面白く，「自分を別人のように感じる」ようになった。この変化を相馬さんはインタビューで自分自身が「ようやく英語に対して心を開き始めた」と語っている。

短期語学研修（ヨーロッパ）には大学生活の折り返し地点である2年生の春休みに参加したが，その頃，自分が変わるきっかけを求めていたという。2年生の1年間は，将来何をしたいのかわからず，しんどかった。何もしたくない。何もできる気がしない。働ける気がしない。目標がない。社会人になって何かするビジョンを持ちたいと思っていた。短期留学は「ふわっと」行ってみたいと思っていたが，自分の性格上，やるかやらないかの選択肢があるとやらないことが多い。これまでの人生の岐路を考えた場合，「こういうの」はやらないと思って，「じゃあやってみよう」と思った。

語学研修中の4週間は言葉がなかなか通じず苦労もしたが，達成感があった。ヨーロッパの風景も街並みも想像通りだったが，体験すると日本とはまるで違っていて「ゲームとか物語に入った気分」だった。日本で感じるような退屈さがなかった。また，英語の授業のクラスメートである他国出身の留学生が雑談で訊いてくる質問が，日本の学生とは異なると感じた。これに気づいた相馬さんは，自分もこれまでに読んだ本についての感想や解釈など，興味のあることを尋ねるなど「何となくでも話してみる」ようにした。そこから「もっと英語力が必要だな」，今回の研修では難しいかもしれないが，「スキルをもっと上げれば将来は出来るんじゃないかな」と思うようになった。この気づきが英語学習の「やる気」につながったという。

語学研修から帰国後は，将来の目標が決まらない中で以前から考えていた夢，つまり一般企業に就職するのではなく大学院に進学し研究者になる可能性を探るという目標を少し明確に考えるようになったが，それでも3年生の秋まで約半年間，相馬さんは「一人でもんもんと」考えた。以前から，辛くても好きなことを仕事にしたいと思っていた。後で好きでなくなったとしても，キャリアを選択する時点では，好きかどうかで決めたい。だから，興味の持てない民間企業への就職はしたくないと思った。でも，それを消去法で企業就職したくないからではなく，「これがやりたいにしたい」と思いたかったという。

インタビュー時の相馬さんは，将来研究者になるかどうかは未定だとした一方で，海外の大学院に留学したい，研究者として外国に住んでみたいという目標が出来たと言った。以前は，海外留学は「やりたくなかった」ことであり，日本に魅力があると感じ自分自身が「日本ブーム」だったが，語学研修参加をきっかけに考えが変わったという。

相馬さん：一回，思い切って（語学研修に）行ってみたら，やっぱり全然違う文化があることに気づいてしまって。

筆者：もっと長期に海外で勉強したり，生活したりしてみたいと思いますか？

相馬さん：思いますね。1ヶ月しかいなかったんですけど，無理だったら1ヶ月は無理だって思ったんです。1ヶ月いられちゃったの

で，1ヶ月いられたらかなり長くいられるって感覚があったので。で，私，海外で暮らせるって。

筆者：自信になった？

相馬さん：なりました。

語学力の面では苦労することも多かったというが，相馬さんが海外で暮らせると自信を持ったのは生活様式の違いを受け入れられるという実感だった。

相馬さん：語学とは別のいろんな面で出来るんだって思って。

筆者：それは具体的にはどういう意味？

相馬：食事とか，環境のストレス具合とか，トイレが違うとか，バスタブがないとかいう，そういう生活面でも無理かなと思っていたら，実際暮らせて大丈夫なんだなって思いました。

このように，活用型の学生，小森さんや相馬さんは，当初計画していた訳ではなかったが，語学研修中に積極性，柔軟性や興味の強さに気づき，行動をし，それが就職活動や大学院進学などに影響を及ぼしたと自己評価していた。また海外駐在や留学などの長期的な国際移動にも強い関心を示していた。

4.2 キャリア形成への具体的活用

次に，もう一つのタイプの語りが見られた3名（宮田さん，三浦さん，山田さん）の語りを検討する。具体的には，計画していた行動を研修中に取り，就職活動や学業，就職後のキャリア準備に活用したという語りである。まず，研修中の具体的な行動を根拠に，就職活動では自分の強みとして自己PRに活用していた宮田さんの事例を見てみよう。

2017年，大手メーカー（総合職）に入社した宮田さんは，就職活動の準備として，2016年の年明けから，ひな型を作るために自己PRを10回以上書き直し，母親の知人（有名企業の社員など数名）に添削してもらった，と語った。その前年，3年生の夏休みに参加したインターンシップの応募書類では，学生時代に最も力を入れたことが英語学習であるという書き方をしていた。しかし，4年生になってから参加した就活塾の先生から「英語が出来る人はたくさんいるので，英語力だけでは勝負できない」と助言されたことをきっかけに，他の学生との差別化を狙い，「積極性，コミュニケーション能力，英語力」の順番で強調する書き方に変えた。その際に使った具体例が，2年生の春休みに参加した短期語学研修（ヨーロッパ）での経験だった。宮田さんは，4週間のヨーロッパ滞在中，出会った人達に，日本の印象を尋ねていた。特に現地の英語学校で同じクラスだった他国出身の留学生には，日本の印象を「片っ端から」訊いたという。

宮田さんは自分の強みを，英語力から積極性や語学を使ったコミュニケーション能力の高さへと変更する戦略を取り，就職を希望する企業に提出する書類だけでなく，採用面接でも活用していた。海外売上比率の高いメーカーに絞って就職活動を進めた宮田さんは，志望したほぼすべての会社の採用面接で英語力について訊かれている。応募書類にTOEICのスコア（800点台）は書いてあるが，「TOEICの点数が高くても，話せない人がいるがどうなのか」と面接で質問された際には，語学研修中の経験を具体的にあげて質問に答えた。その中でも特に面接官の反応が大きかったのは，語学研修中，韓国人留学生と社会問題や将来への不安について英語で話し合ったり，現地の学生（英語の母語話者）とも英語でコミュニケーションを取ったりしたという話だった。

宮田さん：（面接官が）留学の話を訊くと，相

手がどれだけ現地の人とコミュニケーションを取ったのかが，多分わかるんだと思うんですよね。

筆者：宮田さんは（英語力に関して面接官が尋ねる，上述の質問に対して）どういう風に答えていたの？

宮田さん：例えば，結構リアクションで大きかったのは，放課後，学校から帰ってから，韓国人のステイ先が一緒だった子と，毎日，英語で2，3時間話し続けましたという話。

筆者：それに対して，面接官の人たちは，どんな反応を示すの？

宮田さん：ほう，3時間も？　どう話すの？　みたいな反応をしますね。何を話すの？　とか。

また，海外転勤や長期留学に意欲的な小森さんや相馬さんと同様，宮田さんも海外出張に対して積極的な姿勢を見せていた。上述の通り，宮田さんは海外売上比率の高さを一つの基準として会社を選んでいたが，10月に行われた内定式では，「ここにいる人（内定者）全員」に海外出張のチャンスがあると言われたと語った。

次に，研修での体験を就職後の準備に活用していた三浦さんの事例を検討する。2017年春，公立高校の教員（英語）になった三浦さんに幼いころ将来就きたいと思っていた職業をインタビューで尋ねると，小学校から大学時代まで一貫して教師になりたいと思っていたので，他の職業に憧れたことはないと語った。かつては海外で，現在は日本国内で日本語を教えている親類がいる影響から，外国語を教えることや海外で教えることに子どもの頃から興味を持っていたという。幼いころから英語の教師になることを希望していたが，海外渡航経験のない三浦さんが3年生の春休みに語学研修（オセアニア）に参加したのは，「教員になるなら，海外経験がない状態とちょっとでもある状態では全然違うと思った。今，この時期しかないなと思ったから」だった。A大学の語学研修参加者は大半が2年生だが，きょうだいが多く経済的な問題があったことと，サークルの幹部を2年生から3年生にかけて務めることから2年次の参加は難しく，3年次の参加になった。

民間企業への就職を一切考えず，教員採用試験も在住している県のみ受験し合格した三浦さんは，母校で行った教育実習時に語学研修中の経験を活かしていた。例えば，実習中の研修授業のペアワークでは，「（研修中の滞在都市）に行って来ました。でも向こうには住みたくありません。お風呂に入れないからです。どこの国に住んでみたいか，会話しましょう」と，導入の際，英語で書いておき，学生にペアで会話をさせた後，全体授業に戻り相手が言ったことを報告させたという。また，将来の準備として，語学研修中に交通標識などの写真を撮ってきたので，教員になったら授業で活用したいと話した。

宮田さんの事例では研修での経験を，就職活動の自己PRに活用したという語りが見られたが，三浦さんの事例では教材準備のために写真を撮影するなど卒業後のキャリア形成に研修経験が活用されていた。

三番目の事例として，内定獲得後，大学院進学へ進路を変更し，短期語学研修経験を自分の学業に活かしていた山田さんの事例を検討したい。山田さんはインタビュー時，卒業論文執筆と大学院入試の準備で忙しいと話したが，入試に合格し，現在は他大学の大学院に在籍している。

大学入学前，海外渡航経験やボランティア経験はなかった山田さんだが，入学後，さまざまな活動に参加している。例えば，教会で行われている，フィリピンや中国出身のニューカマーの子どもたちを対象とした教育支援のボランティア活動に1年生の冬から約3年間継続して

参加し，インタビュー時は学生ボランティアをまとめるリーダーを務めていた。このボランティアを始めたきっかけは，大学の授業で子どもの貧困や親の収入が子どもの学歴に及ぼす影響などを学んだことだという。また，3年生の夏休みには他大学と合同で実施された国際人材教育プログラムで，英語での集中講義やグループワークを行った。留学生が参加したパーティーにも出席し，「自分たちの思い」を持って勉強をしている人を見ていいなと思った。

この3年生の夏以降，山田さんの大学時代の過ごし方や進路に対する考え方は変化した。まず，留学生と関わり発展途上国出身の友人が出来たことなどにより，在学中に1年程度留学をしたいと考えるようになった。しかし，大学の交換留学制度に合格するにはある一定の語学力を試験で証明する必要がある。これを急に達成することは出来ないと思い，1年の留学は断念し短期語学研修に切り替えた。また，卒業後の進路については大学院進学も考え始めたが，学費など経済的な問題もあるため，進学はせずに就職すると決めていた。

山田さんは，交換留学挑戦から語学研修に変更し，以前から，日本語教育について興味のあった国（オセアニア）の語学研修に参加することに決めた。研修期間は4週間だったが，研修先での経験を自らの学問的関心に活かしていた。出発前，ゼミの先生に相談したところ，滞在する都市の日本語補習校に行ってみたらどうかと勧められ実際に行ってみたという。本当は複数回訪問したかったがボランティアでも書類手続き等が必要であるため，実際の訪問は1回だけとなった。出発前に先行研究を読んで準備した上の訪問だったが，「実際に見てみるのと論文で読むのとは違うものだな」という感想を持ったと話した。

3年生の春休みに語学研修に参加した山田さんは，帰国後，すぐに就職活動を始めた。自分が将来何をしたいのかわからない中，不安が大きく大変だったという。内定を獲得したのは教育関連事業も行っている民間企業だが，内定が出る前から，もっと勉強したい，大学院に行きたいという気持ちを持つようになった。悩んだ末，両親に相談し，大学院進学を認めてもらったという。

大学院進学を決めた山田さんは，国際移動について積極的な姿勢を示していた。インタビュー時，執筆中だった卒業論文のため，山田さんはインタビュー調査を行っていた。経済的な問題がありインタビューは日本国内で実施したが，可能であれば語学研修で滞在した都市で調査をしたかったと話した。また，大学時代の長期留学はあきらめたものの，大学院在学中に1年間留学したいという意欲を見せていた。

三浦さんの事例と同様，山田さんの事例でも語学研修前から計画し，自分の学業のため，具体的な行動がとられていた。また，国際移動に意欲的だった3名（小森さん，相馬さん，宮田さん）と同様，山田さんも大学院留学を視野に入れるという国際志向を持っていた(2)。

以上，活用型学生7名のうち5名の事例を検討した(3)。活用型の学生は，企業の総合職や大学院進学など，専門性が比較的高い進路を選択し，4名については国際移動にも意欲的であった。研修体験の活用については，研修開始後，積極性や柔軟性など自分の強みに気づき，キャリア形成全般の支えとしたという事例と，計画に基づき取った具体的な行動をキャリア形成に活用したという事例があった。

5. 非活用型の学生の語り

本節では，語学研修での経験を就職活動にほとんど又は全く活かさなかったと自己評価をした学生の事例を検討したい。活用型学生に比べて，非活用型学生の進路は，「国内志向」「地元志向」「ワーク・ライフ・バランス優先」とい

う傾向が強かったが，大学在学中の英語学習については力を入れた学生と入れなかった学生に分かれた。また，非活用型学生の研修に関する語りには，活用型学生には見られない否定的な語りが見られた。以下，非活用型6名のうち5名の事例について検討する。

5.1 国内志向，地元志向，ワーク・ライフ・バランス優先

初めに，国内・地元志向が強く，英語学習も重視していない3名（鈴本さん，石原さん，久保寺さん）の語りを検討する。このうちの一人，鈴本さんは2017年4月，専門商社（一般職）に入社した。公立中学・高校を経て「あこがれの」A大学に入学，入学時には「留学」「勉強」にも力を入れた大学生活を送りたいと考えていたが，課外活動（大学公認の音楽系団体）で大役を任され，予想以上に多くの時間を費やすことになってしまった。自宅が遠いこともあり多忙なせいで3年次のゼミは途中で挫折してしまったと言う。

鈴本さんは，父親の仕事の都合で，小学校低学年の頃，海外に約3年間住んでいた経験を持つ帰国生である。全日制の日本人学校に通っていたが，現地の人に家庭教師として教えてもらっていため英語には馴染みがあり，当時から高校時代まで英語は好きな教科だった。しかし，大学入学以降，2年生の夏休みに短期語学研修（アメリカ）に参加し，大学ではTOEIC対策の選択科目を履修したものの，クラブ活動が忙しかったこと，一般職希望の場合はTOEICのスコアを履歴書やエントリーシートに書く必要はないと先輩に言われたことから，3〜4年次には英語の勉強をせず，TOEIC受験もしていない。

実家から通勤可能な企業の一般職に絞って就職活動を進めた鈴本さんは，労働時間が長い傾向にある総合職の働き方に懐疑的であり，それには，主に2つの理由があった。第一の理由は，鈴本さんが自分の母親のように専業主婦になることが目標であることだ。幼いころからの夢を振り返りインタビューで鈴本さんは，「小さいころから，お母さんになるということ以外に夢がない」と語った。

母親は，鈴本さんが幼いころからずっと専業主婦だった。家に帰るといつも家にいて話を聴いてくれたり料理を作ってくれたりし，授業参観等，学校の行事にも必ず来てくれた。いとこの中には，両親が共働きで留守にすることが多く「ぐれそうになったこともある」子がおり，自分がそうならなかったのは，母親が専業主婦であることが理由だと鈴本さんは考えていた。

もう一つの理由は，体調不良をきっかけに自らの大学生活を振り返り，ワーク・ライフ・バランスについて考え就職先を決めたことである。鈴本さんは多忙なクラブ活動が原因で体調を崩してしまい，会社説明会が盛んに開催されていた4月〜5月に就職活動を一時中止し自宅療養せざるを得なくなった。6月から再開したが，専門商社の内定が出て就職活動を終了したのは他の学生よりも遅い9月になってしまった。また，忙しいクラブ活動で影響を受けたのは就職活動だけではなかった。3年生のゼミでは，授業時間外にもグループワーク等，他の学生と会う必要があったが，クラブ活動に時間を取られたせいで参加できず，ゼミの履修をやめることになってしまった。これは鈴本さんにとって悔いの残る出来事であり，インタビューでは大学時代に「もっと勉強したかった」と語った。これらの経験から鈴本さんは，若いからと言って自分の健康を過信せず健康状態に気を配ること，自分が必要とされる場面であっても断る勇気を持つことの重要性を学び，ワーク・ライフ・バランスを総合職よりも取りやすい一般職での就職を決めたと語った。

一方，2017年，大手都市銀行（一般職）に

就職した石原さんが短期語学研修(ヨーロッパ)に参加したのは，2年生の春休みだった。その少し前から卒業後は公務員になりたいと思っていたが，公務員として約40年間，同じ組織で働き続けることが出来るか確信が持てなかった。また，新卒採用の就職活動が出来るのは人生で今の時期だけであり，公務員試験を後で受験することは可能であると思い，公務員ではなく民間企業への就職を希望するようになったと話した。

鈴本さんの事例と同様，石原さんのキャリアの選択にも「国内志向」「地元志向」が見られた。石原さんは，語学研修終了後，3年生の夏休みまでには，志望する業種や職種（総合職・一般職）の選択をしていた。夏休みには企業が行うインターンシップに多くの学生が参加するが，石原さんは希望業種を絞り込み，国内業務を主に扱う損害保険会社と信託銀行のインターンシップに応募した（結果は不合格)。また職種についても考え，転勤の可能性がなく実家から通勤可能な企業の一般職のみを希望して就職活動をすることに決めたという。

さらに，総合職を希望しなかった理由を尋ねたところ，鈴本さんと同じように，ワーク・ライフ・バランスを優先し仕事をしたい，という総合職に対する否定的な語りが見られた。

英語力の活用についても鈴本さんと石原さんには共通点があった。鈴本さんと同様，石原さんも就職活動に向けてTOEIC対策の勉強をしたり，実際に試験を受けたりは一切していなかった。理由を尋ねると，金融業界に一般職で就職した，ゼミの先輩にTOEIC等の英語の資格は不要だと聞いていたからだという。

民間企業の一般職ではないが,「国内志向」「地元志向」だったのが，次に述べる久保寺さんの事例である。久保寺さんは2016年春に大学を卒業し，出身県の地方公務員（行政職）になった。久保寺さんは一般企業への就職は全く考えず，地方公務員試験をいくつか受験しすべて合格したが，最終的に，第一志望である出身県の地方公務員になることに決めた。Uターン就職をする理由を尋ねたところ，県内全域への異動の可能性があるため必ずしも実家に住めるという保証はないが，出来るだけ家族の近くにいられるよう，就職は出身県でしようと思ったと話した。大学在学中，久保寺さんは親元を離れ，大学の近くで一人暮らしをしていた。大学生活は充実していたが，心細くホームシックになることもかなりあったという。

2年生の夏休み，大学が実施したアメリカの語学研修に参加した目的は，「英語力をつける」ことだった。しかし，その時点ですでに，帰国後は公務員試験の準備を始めようと決めていた。大学在学中4年間，国際交流サークルにも入っていたが，民間企業への就職を考えず，国内向け業務に専念する可能性が極めて高い地方公務員を目指した久保寺さんの国内志向は強く，大学在学中，上述の2名（鈴本さん，石原さん）と同様，TOEICを受験することはなかった。また，面接では，高校時代に取得した英検2級が履歴書に書いてあることに気付いた面接官に,「英語話せるんだよね」と聞かれたので,「自己紹介ぐらいはできます」と答えて「切り抜け」，それ以上，詳しく聞かれることもなかったと言う。

ここまで，非活用型の学生3名の事例について述べたが，次に検討する川本さんの事例も，「国内志向」「地元志向」が見られた。川本さんが2017年春に就職したのは信用組合である。職種（一般職・総合職）については，入行3年後に選択可能な制度になっているという。大手都市銀行への就職を希望しなかった理由をインタビューで尋ねたところ，大手都市銀行の総合職は全国に転勤があるのが理由だと川本さんは答えた。「限られたエリアの中で転々とした方がいい。負担も少ない」。転居を伴う異動を

避けるためなら，大手都市銀行のエリア総合職（転勤する地域が限定されている総合職）という選択肢もあるが，その点はどう思うか訊くと，「地域に根差して丁寧に対応できる」「のんびりしている私には合っている。長く働くことを考えると……」という語りが見られ，川本さんもワーク・ライフ・バランスを重視していることが示唆された。

その一方，川本さんの語りは，英語学習という点で大きく異なっていた。川本さんの英語力はかなり高く，TOEIC のスコアは 700 点台後半である。大学の選択科目で TOEIC 対策の授業を履修した以外は独学で勉強し，2〜3 年次に 3〜4 回受験したという。勉強した成果が現われ，点数が上がっていくのはとても嬉しかった。英語資格試験のスコア向上のため努力をしたという語りは非活用型の上述の 3 名（鈴本さん，石原さん，久保寺さん）には見られないものだった。

しかし，英語力活用という点では，川本さんは自分の英語力を強みにして就職したいとは全く考えていなかった。それは，川本さんが自らのキャリアについて考え，希望の業種決定の基準にしたのは英語を使うことではなく，「生活に根差した」ものやサービスを扱うことだったからだ。そして，このような考えに至った一つの要因として，2 年生の春休みに参加した語学研修（ヨーロッパ）から帰国した際の経験について，生活様式の異なるヨーロッパの家庭で 4 週間を過ごし，毎日シャワーではなくお風呂に入れるなど，自分の「日常」の重要性を認識したと語った。

この異文化体験を通して川本さんは「生活に根差したもの」を扱う仕事をしたいと考えるようになったと話した。では「生活に根差したもの」とはどのようなものを意味するのか尋ねると「なるべく多くの人に関係したもの」「たくさんの人の役に立てるもの」と川本さんは答えた。このような考えを持った川本さんが金融業界を選んだのは「お金は誰でも使うもの」だからだ。その中でも地域に根差した地方銀行や信用組合への就職を希望した川本さんは，就職活動中に海外渡航経験や英語力を面接で訊かれることは一切なかったという。

以上，非活用型 4 名の事例を検討した[(4)]。これらの事例は，業務内容が国内向けである「国内志向」，転居を伴う転勤がない（または転勤が県内に限られる）「地元志向」，長時間労働の可能性が低い「ワーク・ライフ・バランス優先」という点が特徴的だと言える。英語の学習については，大学在学中，力を入れた学生もいたが，国際業務への関心は低く，就職活動では英語力は強みとして活用されていなかった。

5.2　非活用型だが，国際志向の学生の語り

最後に，非活用型学生の例外的な事例として，田原さんの事例を検討したい。田原さんは国際移動や英語力向上に意欲的であるにも関わらず，研修経験を就職活動に活用しなかったと語った学生である。

2016 年，大手通信キャリア（総合職）に入社した田原さんは，合計 7 社から内定を獲得し，内定先を尋ねたところシンクタンクや外資系コンサルティング会社が含まれていた。「国内志向」「地元志向」の強い非活用型の他の学生とは異なり，田原さんは営業職として日本全国への転勤の可能性があることを承知したうえで入社を決めていた。また，その会社には海外に駐在する女性社員がいることを既に知っており，将来的には海外拠点への転勤を希望することも視野に入れていると語った。

このように，田原さんは，国際移動への強い意欲があり，高い英語力（TOEIC 800 点台）を有しているにも関わらず，就職活動では自分の英語力をあえて強調しない戦略を取っていた。これは，大学のキャリアセンター職員の助言を

受けたのが理由だという。就職活動中，田原さんはキャリアセンター職員との面談の機会をかなり頻繁に利用していた。面談でエントリーシートを添削してもらった際などに，英語力の高い学生は英語力ではなく別の点で自分を差別化していくのが望ましいというアドバイスを受け，それに従っていた。

また，田原さんは，他の非活用型学生と同様，短期語学研修の経験を，就職活動では活かさなかったと自己評価をしていた。理由を尋ねると，田原さんはエントリーシートに書いたり面接で話したりする内容を決める際，自分の主な経験をまとめ，OB 訪問で知り合った，企業の若手社員にどの経験を強調すべきか相談に乗ってもらっていた。その結果，語学研修経験は「弱い」ということで活用することはなかったと答えた。では田原さんが就職活動で活用した経験はどのようなものだったのか。活用していたのは主に2つの経験で，一つは大学時代のアルバイト，もう一つは高校の部活動だった。後者は，運動部のキャプテンを務めた田原さんが，弱小チームを変えるため先輩・後輩に関係なくお互いの課題を指摘する仕組みを工夫し，引退前の最終試合で勝利を収めたという話であった。インタビュー中，田原さんは研修の明確な批判はしなかったが，研修の成果を他の人生経験から得た成果と比較した場合，自分の強みをアピールする証拠として使うには，不十分だという否定的な自己評価をしていた。

語学研修経験に対する否定的な語りは，すでに検討した非活用型の他の学生の語りにも見られた[5]。たとえば，鈴本さんは自分が参加した語学研修について 「日本人ばかり」で，「あれだけの高いお金を払ったのに，英語を話す機会がなかった」と話した。また，石原さんは，研修体験を就職活動に活用しなかった理由として，期間が1ヶ月未満という短期間だったことに加え，研修内容が英語学校での授業，ホームステイ，放課後や週末の観光で，学生の主体性が必要とされていなかったことを指摘していた。

以上，田原さんの事例は，大学在学中，英語学習に力を入れ，就職後の国際移動にも意欲的な学生が，自分の英語力や短期語学研修の経験を就職活動で積極的に活用していないことを示していた。また，田原さんを含む3名の非活用型の学生の語りには，短期語学研修の成果が就職活動でアピールポイントとするには不十分であったことを示唆する否定的な語りが見られた。

6. 考察

本研究の結果では，在学中に1ヶ月未満の短期語学研修に参加した学生は，語学研修の経験を就職活動や進学準備に活かしたと自己評価する学生と，ほとんど又は全く活かさなかった自己評価する2つのグループに分かれた。

まず，職業，職種（一般職・総合職）の選択という点では，「活用型」の学生7名のうち民間企業に就職した学生は，海外売上高が多い，海外に子会社があるなど「国際志向」の強い企業の総合職として就職していた。また，その他の学生も，英語の教員，大学院進学など，専門性が高く，語学力（英語力）が必要とされる職業に就いたり，目指したりする傾向が見られた。国際移動に関しては全員ではないが，海外駐在・出張や大学院留学に積極的な姿勢を見せる学生もいた。これに対して，「非活用型」の学生6名は，例外的な事例も見られたが，語学力を必要としない国内業務担当を希望する「国内志向」，実家から通勤可能な範囲の会社に就職する「地元志向」が強かった。英語学習に対する意欲は，高い学生と低い学生がいた。

次に，活用型学生が研修経験を活用した方法は，2つに分かれた。一つの方法は，事前に準備した訳ではないが，研修中に発見・発揮した自分の能力や意識（積極性，リスクを取る力，

異文化への興味・柔軟性）を，就職活動や進学準備全般の支えとして活用する方法である。もう一つは，事前に計画し，研修中に実行したことを，学業や就職活動，就職後のキャリアに活用する方法だった。民間企業に就職する学生は履歴書や面接のアピールポイントとして，教員志望の学生は，帰国後おこなった教育実習で，学生のペアワークの導入部分に研修体験を盛り込むなどして活用していた。

また，英語力については，活用型学生が非活用型学生と比較して，必ずしも英語力が高い訳ではないという結果が出た。活用型の大学院進学者や非活用型の4名は就職活動（または進学準備）に向けてTOEICなどの英語資格試験を受験していないため比較は難しいが，可能な範囲で比較してみると，活用型の小森さんのTOEICの点数に比べて，非活用型の田原さんや川本さんの点数は100点以上高かった。大学在学中，英語力向上のため努力したにも関わらず国際志向の職業選択をしなかった川本さんの事例は，英語力向上に熱心な学生が国際志向とは一概に言えないことを示唆している。一方，TOEIC 800点台の2名（活用型の宮田さん，非活用型の田原さん）の事例からは，英語力が比較的高い学生の就職活動でとるべき戦略として，英語力を強調しない指導がなされていることが示された。

非活用型の学生の事例からは，語学研修の成果に対する否定的な語りが見られた。非活用型の学生が就職活動で活用した他の経験と比較し，示唆または指摘した点（期間が短い，英語力向上や異文化体験の機会として不十分，チームワークやリーダーシップ，自発性を発揮する場として不十分）は，グローバル人材育成推進会議（2012）が示す，グローバル人材に必要とされる3つの「要素」の伸長の場に語学研修がなっていないという批判ともいえる。

この考察をこれまでの知見と照らし合わせると，岡本（2017）の質問紙調査と同様，海外学習体験を就職活動に活かしたと回答した学生については，能力の向上，意識の高まり，キャリア形成など，本研究でも同様の傾向が見られた。しかし，その一方で，岡本（2017）では，対象者13名全員が活かしたと回答したのに対して，本研究では，約半数の学生が海外学習体験を活用しなかったという自己評価をする結果となった。

7. 課題

太田（2018）が指摘する通り，短期語学研修など，大学実施の留学（研修）プログラムは，元々専門分野を限定せずに広く学生を募集し，なるべく多くの学生に海外体験をさせることを目的とし，ともすれば海外体験が自己目的化しているところがあった。確かにそういう面があることは否定できないが，語学研修を実施している大学は今でも多く，学生のニーズがあるのも事実である。海外学習体験が多様な形をとるようになっているとはいえ，様々な専攻の学生がともに参加し，異文化体験をする形の語学研修が日本の大学から急に消滅することは無いと思われる。

この状況を前提とし短期語学研修の課題を考えたい。上述の太田（2018）がさらに指摘している通り，語学研修などの留学プログラムは，大学での4年間の学びやカリキュラムの位置づけ，関連性があまり示されてこなかった。さまざまな専攻の学生が参加するという研修の性格上，カリキュラムとの関連性を示すのは難しい面もあるが，本稿の活用型学生が自発的に行っていた「事前準備・学習」，「振り返り」を大学側がより積極的，長期的に促進する必要があると考える。本研究の結果が示す通り，研修成果の活用の方法やタイミングには多様な形がある。研修経験やその成果をより実りあるものにするために，研修出発前のガイダンスや帰国後

の報告会，就職活動開始前の就職セミナーなどの機会を利用して，先輩学生の研修経験，就職活動について知る機会や，自分の研修成果をまとめ発表する機会を設けるなどの方法が考えられる。

本論文は，わずか13名の女子学生を対象とし，またライフコースの中でも就職活動という短い期間を扱った調査である。1ヶ月未満の海外体験学習がキャリアに及ぼす影響については，同じ大学の他の海外体験学習との比較，他大学の同類の海外体験学習との比較，男女の比較，長期にわたる追跡調査などさまざまな知見の蓄積が望まれる。

参考文献

太田浩（2018）「おわりに」横田雅弘・太田浩・新見有紀子『海外留学がキャリアと人生に与えるインパクト―大規模調査による留学の効果測定―』学文社 pp. 259-261.

太田浩（2018）「日本の海外留学促進政策の変遷」横田雅弘・太田浩・新見有紀子『海外留学がキャリアと人生に与えるインパクト―大規模調査による留学の効果測定―』学文社 pp. 2-28.

岡本能里子（2017）「補足資料　1ヶ月未満の海外体験学習におけるインパクト（質問紙調査から）」子島進・藤原孝章『大学における海外体験学習への挑戦』ナカニシヤ出版 pp. 176-181.

川喜田二郎（1967）『発想法―創造性開発のために』中央公論社.

川喜田二郎（1970）『続・発想法―KJ法の展開と応用』中央公論社.

グローバル人材育成推進会議（2012）『グローバル人材育成戦略（グローバル人材育成推進会議　審議まとめ』http://www.kantei.go.jp/jp/singi/global/1206011matome.pdf（2018年10月1日閲覧）.

小林明（2011）「日本人学生の海外留学阻害要因と今後の対策」ウェブマガジン『留学交流』2011年5月 JASSO（独立行政法人日本学生支援機構）https://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2011/__icsFiles/afieldfile/2015/11/19/akirakobayashi.pdf（2018年10月1日閲覧）.

小松洋（2013）「ドキュメントデータをまとめるために―KJ法の活用」大谷信介・木下栄二・後藤範章・小松洋『新・社会調査へのアプローチ―論理と方法―』ミネルヴァ書房 pp. 308-310.

新見有紀子・米澤彰純・秋庭裕子（2018）「留学経験が収入や職業キャリアにもたらす効果」横田雅弘・太田浩・新見有紀子『海外留学がキャリアと人生に与えるインパクト―大規模調査による留学の効果測定―』学文社 pp. 156-178.

新見有紀子・岡本能里子（2017）「海外留学とキャリア形成」子島進・藤原孝章『大学における海外体験学習への挑戦』ナカニシヤ出版 pp. 162-175.

日本学生支援機構（2017）『平成28年度協定等に基づく日本人学生留学状況調査結果』https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_s/2017/__icsFiles/afieldfile/2018/02/23/short_term16.pdf（2018年10月1日閲覧）

子島進・藤原孝章（2017）「大学における海外体験学習」子島進・藤原孝章『大学における海外体験学習への挑戦』ナカニシヤ出版 pp. 1-19.

中村高康（2014）「日本における「間断のない移行」の特質と現状」溝上慎一・松下佳代『高校・大学から仕事へのトランジション―変容する能力・アイデンティティと教育』ナカニシヤ出版 pp. 43-61.

谷田川ルミ（2016）『大学生のキャリアとジェンダー―大学生調査にみるキャリア支援への示唆』学文社.

横田雅弘・太田浩・新見有紀子（2018）『海外留学がキャリアと人生に与えるインパクト―大規模調査による留学の効果測定―』学文社.

注

(1) KJ法は，川喜田二郎が発案したデータの分析方法である（川喜田 1967,1970 小松 2013）。KJ法でデータをまとめ，文章にするまでには，大きく分けて①紙きれ（カード）作り②グループ編成③図解化④文章化という4段階の作業を行う。この中で，②のグループ編成は，小チーム編成，中チーム編成，大チーム編成の順番で行う。グループを編成した後は，グループ間の関係を一層明確にするため，図解化を行う。グループ編成後，図解化せず文章化する方法も提唱されているが，発案者の川喜田によれば，図解化をした上で文章化するほうが望ましいとされている。

(2) 公立高校の教員に内定している三浦さんの語りには，海外転勤や留学を目指す国際志向は見られなかった。

(3) 紙幅の都合上，活用型の他の2名（井上さん，山内さん）の事例については詳細に検討することは出来ないが，短期語学研修経験を進学準備（どちらもA大学大学院に進学）に活かしたという語りが見られた。井上さんは生物系，山内さんは心理系専攻だが，英語力向上には大学生活を通して意欲的だった。しかし，大学院修了後の進路については，2名とも専門分野を活かし日本国内での就職を希望しているため，国際移動に対して積極的ではなかった。

(4) 非活用型の残りの1名（前田さん）も，国内志向，地元志向が強く，ワーク・ライフ・バランスを優先させた就職活動を行っていた。最終的に国内業務を行う財団法人に就職を決めたが，英語を使う仕事を希望しておらず，TOEIC受験などは全くしていない。

(5) 活用型学生の語りには，研修経験に関する否定的な

語りは見られなかった。

The Impact of Short-Term Study Abroad Programs on Job-Seeking Activities: An Analysis of Participants' Interviews

Minori KOBAYASHI (Rikkyo University)

Abstract

This study aims to examine how college students self-evaluate the ways they utilized the experience participating in college, short-term, study abroad programs in their career development (such as job-seeking activities) or preparation for graduate studies. Thirteen female, college students were interviewed after determining their career path following graduation from university. This study revealed that 7 of 13 students reported applying short-term study abroad experiences to their job-hunting activities. On the other hand, the other 6 students reported their study abroad experiences had little or no relevance to their job search. The former group of students aimed at professional occupations such as *Sogo-shoku* or going on to graduate school. They were also interested in improving English proficiency and international migration. By contrast, the latter group of students showed their interest in domestic-oriented jobs which do not require English proficiency as well as local-oriented jobs that allow them to live with their parents. They also tended to prioritize the balance between work and life. In addition, the latter group of students reported their short-term programs were too short as well as passive, and that is why it was not relevant to job-seeking activities. These results illustrate the importance of pre-departure learning and reflection after the program.

Keywords : College Student, Short-Term Study Abroad Program, Job-Seeking Activities, Global Oriented, Career for Women